



日本記者クラブ
記者会見

夢は続く 2020年東京パラリンピックへ

佐藤 真海
パラリンピック女子陸上選手

2013年10月29日

東京へのオリンピック・パラリンピック招致活動で活躍したパラリンピアン、佐藤真海さん（サントリーホールディングス株式会社 CSR 推進部）が、パラリンピックとの出会い、招致活動、そして2020年に向けた思いについて語った。「スポーツの力を日本に、世界中に広げたいという思い。地元である東北への思い。パラリンピックももっともっと盛り上げていきたい思い。それが2020年、みんなで目指すオリンピック・パラリンピックが日本に来て、夢が続いたな、と心強く思っています」

司会：別府育郎 日本記者クラブ企画委員（産経新聞論説委員室論説副委員長）

日本記者クラブ YouTube チャンネル
<http://www.youtube.com/watch?v=CKnK7yKmV8g>

©公益社団法人 日本記者クラブ

佐藤真海・パラリンピック女子陸上選手 皆さん、こんにちは。本日はお招きいただきましてありがとうございます。パラリンピアン、そしてサントリーの佐藤真海と申します。まず私のほうからお話をさせていただきたいと思います。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は宮城県の気仙沼市の出身です。海と山に囲まれる気仙沼で、野山を駆け巡るスポーツ少女として育ちました。小学校では水泳を、気仙沼中学校と仙台育英高校では陸上部で長距離をしておりました。常に文武両道ということを目指し、歩んできました。

大学生になったら、チアリーディングをしたいという夢があり、2000年の早稲田大学入学とともに、応援部のチアリーダーズに入部しました。

大学2年生の時の冬に骨肉腫という病気がわかり入院。2002年4月、大学3年生の春に、手術をして右足の膝から下を切断し、義足での生活がスタートしました。

入院生活を経て大学に復帰しても、全てを失ってしまったような気持ちになりました。もう一度目標を持ちたいと、これまでの自分の人生を振り返る中で、常にスポーツがありましたので、わらにもすすがる思いでスポーツを始めました。

義肢装具士の白井二美男さんを知り、スポーツ義足に出会い、退院して数カ月後にはスポーツを再開することができました。

そこから、心身ともに前向きになることができました。就職活動にも取り組み、チャレンジ精神を大事にするサントリーへ2004年に入社。そして、同年のアテネのパラリンピックに出場することができました。それが走り幅跳び選手としての世界へのチャレンジのスタートでした。

仕事とスポーツを両立する環境を相談してつくりながら、2008年の北京パラリンピック、そして2012年のロンドンパラリンピックと、これまで3大会連続で出場できました。

本当にスポーツ、そしてパラリンピックに救われていながらも、命の恩人のようなものだと思っています。

招致プレゼンの中で、「失ったものではなく、いまあるものが一番大事であることに気づかされた」と触れているのですが、これは自分自身の経験を通して、強く実感してきた思いです。

震災を経て、より強く実感したスポーツの力

続きまして、9月7日ブエノスアイレスでの2020年東京オリンピック・パラリンピック招致活動でプレゼンターを務めさせていただいた際の心構え等について、お話をさせていただきたいと思います。

2011年3月11日に東日本大震災があり、大きな故郷が大きな被害を受けました。ちょうどその時期私は、ロンドンのパラリンピックに向けて、

走り幅跳びの踏み切り足を、自分の足から右側の義足側に変えるという大きなチャレンジをしていたのですが、記録的にも伸び悩んでいた時期でもありました。そのとき、自分が競技を続けていくという気持ちを失いそうになったのですが、大切な故郷の、そして子どもたちの力になりたいと思い、すぐに気仙沼の母校に帰って交流を始めました。

できる限り時間をつくり子どもたちに会いに行きました。

自分としては子どもたちを励ますつもりでしたが、実は私のほうが力をもらっていたのです。子どもたちの歯をぐっと食いしばって闘う姿に、自分自身にもこういう気仙沼魂があるのだということ強く感じさせてもらいました。

そして、子どもたちに語りかける中で、本当に大事なものに気づかせてもらいました。それは、命の大切さであり、命を大切にすること、一日一日を大事に過ごす、一人一人が与えられた環境で精いっぱい力を尽くすことなんじゃないかなというふうに感じました。

そうして力をもらい、2012年のロンドンパラリンピックに向かうことができました。

私は10年前の病気から立ち上がる過程の中で、スポーツの力というもの感じてきましたが、この震災を機に、多くの地元の、そして東北の人たちと触れ合う中で、スポーツの力とは夢と希望を育み、人と人をつないでいくものだ、ということさらさら強く実感しました。そのことはスピーチの中でも触れさせていただいています。

スポーツとして楽しんだロンドン・パラリンピック

招致活動について自分の気持ちを明確にしてくれたのは、昨年のロンドンパラリンピックへ出場したときに得た感動です。8万人入るスタジアムが、朝の部も夜の部も満員で、本当にパラリンピックを、一スポーツとして観客の皆さんが心から楽しんでいる様子がすごく心に残っています。

その熱狂はスタジアムの中だけの話ではなくて、例えばパラリンピックのテレビCMを放送していましたが、それがスポーツとして、本当にエキサイティングな魅力を伝えていました。

パラリンピックの期間中は、チャンネル4というパラリンピックの放送権を獲得した民放が、朝から夜遅くまで、ライブ中継の他に、ゲストを招いてすごくおもしろい番組づくりをしていました。

街の中にも看板、ポスターがあり、スポーツバーでもパラリンピックを中継していました。

また、自分の種目が早く終わりましたので、6種目ほど、ほかの競技の応援に行きました。そのときに、オリンピックスタジアムだけではなく、ほかの競技場でも満員の観客の中で同じように盛り上がっていたことも確かめることができました。

した。

あとは、ゲームメーカーと呼ばれていたボランティアの皆さん。このボランティアの皆さんの笑顔、そして気軽にコミュニケーションをさせてもらえる雰囲気、とても気持ちが温かくなったことは、大切な思い出として残っております。

ロンドンから帰りまして、パラリンピックについて、何がどうしてそういうふうになったんだろうということを自分なりに調べてみました。また現地を再び訪れて、パラリンピックの発祥の地と言われているストック・マンデビル病院の見学に行きました。そこでは、パラリンピックの創始者であるグッドマン先生による、リハビリの一環でスポーツをして、そして社会の一員として送り出す、「タックスペイヤーにする」という言葉が大切にされていました。納税者にするということは、つまり社会で一人の人間として働いていく、そういう考え方のもとでリハビリテーションが、昔だけではなく、いま現在も行われていることを知りました。

例えば、リハビリの中で、スポーツだけではなく、美術、音楽、そして職業訓練ですとか、その人が選んで、社会に出ていくためにやりたいことに取り組み、“As normal as possible”という言葉を使っていたんですけれども、なるべく普通のことをして、普通の気持ちになって社会に出ていく、そういう仕組みがしっかりとできていました。

また、病院の周りには陸上競技場や体育館、ジムがあり、そこは近隣の住民の皆さんも使用できるので、一般の人と触れ合いながらリハビリもできる施設になっていました。

そこで感銘を受けたのが、パラリンピック選手が週に一度来て、リハビリから立ち上がろうとする人たちに、車いすラグビーなどを教えたりしている姿を見たことです。「仕事としてやっているのか、それともボランティアとしてやっているのか」ということを聞いたら、ボランティアとしてやっているという答えでした。パラリンピアンたちもここで力をもらって、新しい可能性に気づいた、そういう自分たちだからこそ、こうして後に続く人たちのためにやっていきたいという思いを強く持っていたことを、すばらしいと感じました。

故郷に帰り、震災後もあらためてスポーツの力を実感したこと、ロンドンパラリンピックがスポーツとして位置づけられていたという感動、またそのルーツとなるストック・マンデビル病院で感じたこと、これら全てが私の招致活動への取組みにつながっています。このスポーツの力をぜひ日本でも、という気持ちを強く持ったのです。

9月の最初のプレゼンテーションに立つまでのプロセスですが、まず3月にI O C評価委員会の皆さんの東京視察の際に、パラリンピックの部でプレゼンテーションを、アスリート代表として、車いすテニスの国枝慎吾選手と一緒にやらせて

いただきました。

その翌月の4月に、9月の最終プレゼンテーションで、というような公式なオファーを受けましたが、自分がどんな役割を担うのか良く分からず、本当にプレゼンテーションでスピーチすると実感したのは東京での出陣式で、ブエノスアイレスに出発する10日ぐらい前のことでした。いよいよだなという気持ちになりましたが、まだ自分のスピーチの原稿案が届いていないという、すごく緊張感の強い時期でもありました。

その3月から9月まで準備期間中は、遠征等で海外に行く際にコミュニケーションを積極的にして、英語を日ごろから使うようにすること、日本にいるときにも、なるべく英語に触れるようにすること、海外の情報に触れるようにすることを意識しました。

それから、7月にスイスのローザンヌで招致活動のテクニカルミーティングがあったんですけども、その際、東京を紹介するブースの前に立たせていただいて、アスリートがどんな気持ちでやっているか、また、東京に住む一人の住民として、このコンパクトなオリンピック・パラリンピックの魅力を英語でお伝えする役目をさせていただきました。

あとは、7月には韓国でI O C委員の主催したスポーツ外交のフォーラムにも参加して、そこに出席されたI O C委員の皆さんとお話をしたりしたことも、プレゼンテーションにつながったと思います。

震災後感じたスポーツの力

9月の最終プレゼンテーションに向けた様々な活動の中で、このパラリンピックへのチャレンジをしてきた10年間、特に震災後感じたスポーツの力というもの、あとは故郷、東北への思い、それからパラリンピックもオリンピックと同じように注目を受けて、そして同じようなレベルで戦っていく、そういう自分の思いを自分の言葉で伝えていく、その心構えを貫き通ささせていただきました。

安倍首相も加わり「オールジャパン」といわれたプレゼンテーションメンバーの一員に加わらせていただき、あのような場所で自分の気持ちを皆さんに伝えることができたことは、とても幸せなことだと思っています。

実は、今年の2013年というのは、招致活動以外にも充実した一年になっています。アスリートとして、4月にブラジルの国際大会に出場したのですけれども、そのときに、5メートル2センチを跳び、初めて5メートルのジャンパーの仲間入りをすることができました。最初に出場したパラリンピックで優勝した選手が出した5メートル、本当にすごい壁だなと思っていました。当時の私は、3メートル95という記録で世界デビューしたので、5メートルというのが本当に大きな目標でした。

さらに、今年は7月にフランスで世界選手権が開催されました。そこで、初めて銅メダルを獲得しました。10年を経てやっと獲得した大きな大会でのメダルです。

その世界選手権では、3月の評価委員会でお会いした方と再会したり、あとはIPCのクレーブン会長とお話しさせてもらったばかりでなく、表彰までしてもらったりと、人と人のつながりとしてもかけがえのない一年となりました。

選手の自己負担は年144万円

最後に、2020年に向けての思いをお話しさせていただきます。まず、パラリンピックについてです。

昨年のロンドンパラリンピックの出場選手でアンケート調査を行ったところ、選手たちの年間の自己負担額は、平均で144万円という結果が得られました。

実は、4年前の北京大会に向かう選手たちのアンケートをとったときには、111万円だったので、さらに負担は増えている。世界で互角に戦っていくためには、より多くのお金と、そして時間と環境が必要になってきています。それが確保できずに、競技継続を断念してしまうという選手がいるのも事実です。

そういう環境で、日本の競技レベルはどうかというところですけれども、アテネ大会、北京大会、そしてロンドン大会、この3大会でメダル獲得数は10位、17位、24位と大幅に落ちてきております。2020年に向けて、しっかりと、選手たちのレベルを上げていくことが求められると思っています。そのためにも、オリンピック選手と同じような練習環境を確保していくこと、制度や仕組みづくりというものを充実させていく必要があると感じています。

昨年、ロンドン、ストック・マンデビルに行ったときに、実は、選手の発掘、育成の取り組みについても視察することができました。それはイギリスのパラリンピック委員会主催の全ての種目を一堂に集めての体験会で、そこにはパラリンピアンや英国代表のスタッフが参加して、より多くの人にスポーツに触れてもらう、体験してもらうということを行っていました。

さらに、パラリンピック委員会が主催するものだけではなくて、陸上連盟が主催して、地域ごとに分けて若手の有望選手を発掘していたのです。有望選手の発掘というと、どうしてもずば抜けた才能を持った選手を引き抜いていくイメージがあるかもしれませんが、実際にはまず体験する機会をつくる、その後、その地域で健常者と一緒に陸上をやるクラブを紹介していくという、地域に根ざした仕組みになっていました。

このような、本当にロンドンオリンピック・パラリンピックのレガシーと言えるものをみて、それが2012年の熱気が冷めないうちに実施されて

いるということが、本当にすばらしいなと思いました。日本でもこうしたサステナブルな発掘、育成活動も、トップレベルの強化だけではなく、必要だと考えています。

次に、2020年の大会は、みんなで作るオリンピック・パラリンピックになってほしいと思っています。それは、自分自身が3大会に出場してきて、心に残って思い出として持ち帰るものというのは、その雰囲気ですとか現地の皆さんとの交流、観客の皆さんの笑顔、熱狂、全てを含めた思い出なんだと感じました。そういう意味でも、日本で開催される時でも、できるだけ多くの皆さんに参加してほしい。そして、世界中から集まる選手だけではなく、観客の皆さんにも心から楽しんでもらいたいというふうに願っています。

そのときに、パラリンピックの視点で考えるということは、障がいがある人にも優しいもの、ユニバーサルデザインをつくっていくということが必要になってくるんですけれども、そのときに、障がいの有無だけではなくて、例えば子連れのお母さん、お年寄り、小さな子どもなど、全ての人にとって優しい、そういう視点を持つことが大切だというふうに感じています。それが駅、街の中、あとは大会の会場、さらに開会式、閉会式の作り方ですとか、パンフレットなどの制作物やテレビ等を通しての伝え方についても、そういう視点を持つことが大切ではないでしょうか。

その中で、日本のテクノロジーを生かして、さすがは日本と言える大会をみんなで作っていただけたらいいなと考えています。

あともう1つ、みんなで作るといえるときにはもちろん東北も含まれると思います。2020年に、心から一緒に大会を楽しんでもらうためにも、復興というものが不可欠だと思っています。その中で、東北出身の一員として、微力ながら自分にできることは継続していきたい、新しいことにも取り組んでいきたいという思いです。それは競技活動以外にも続けていきたい、チャレンジしていきたいと思っています。

7年後に向けて、みんな目指す夢というものができたことをすごく心強く思っています。これまでになかったような情熱と、そして日本人としての誇りと自信を持てるような、そんな7年間を多くの人たちと一緒につくっていただけたらいいなと考えております。(拍手)

《質疑応答》

司会：別府育郎・企画委員（産経新聞論説委員室論説副委員長） どうもありがとうございます。これから質疑に入りますが、その前に、司会から1問だけお伺いします。

今回の2020年のオリンピック・パラリンピックの招致を通じて、おそらく日本でオリンピックとパラリンピックの一体感というのが初めて感じられたというのが特徴だと思っています。おそ

らくその象徴的な存在が佐藤さんになられたと思うんですが、今後7年間、もしくはもっとその後まで、オリンピックとパラリンピック、もしくはオリンピックとパラリンピック、このせつかく生まれた一体感をどう続けていくか、発展させていくか、何が必要か、どういうことをしたいか、その辺、ちょっとお話し願えればと思います。

オリンピックとパラリンピックを常にセットで

佐藤 2020年に向けた、まずスタートとなる最初のプレゼンテーションで、その中の一員に加わらせてもらったことで、オリンピック・パラリンピックというように一体として皆さんに知ってもらえたことは、すごくいいスタートだなと思っています。

しかしながら、実際にはこれからまだまだやっていくべきことがあるというのが現状だと思います。その中で、例えば先ほどもお話したように、ユニバーサルデザインの視点ですとか、またトレーニング環境、仕組みづくり、そして社会の理解、本当に1つ1つやっていくことがある中で、アスリート同士でできることはもちろん架け橋になっていきたいというふうには思っていますし、それよりもっと影響力のあります皆さんのお力をおかりして、常にオリンピック、そしてパラリンピックをセットとして、より多くの認知を、そして価値が高まるような、そういうムーブメントの後押しをしていただけたらうれしいなと感じています。

司会 ありがとうございます。それでは、質疑に移ります。

質問 いま実業団でご活躍ですね。それから、その前に、大学時代にいろいろ競技をおやりになったと。現役というのは、いま実業団でおやりになっているんですが、一番ご苦労されるというか、きつい点はどんなことでしょうか。練習を続けられる上で、です。

道なき道を、人と出会って手探りで進んできた

佐藤 ご質問ありがとうございます。

実業団というのはちょっと違って、私、普通に就職活動をして一社員として入社したという経緯があります。それなので、最初からスポーツを両立できる環境になかったというところがスタートで、でも、そこからいまいかできない世界のチャレンジを続けたいというところで相談しながら、そして練習も仕事の一環、競技も仕事の一環としてやれるようになったのが、入社してから3年か4年たってからなのです。

でも、社員の皆さんの理解と応援というのがなかったらこれまで続けてこれなかったと思います。仕事に関しても、もともと社会貢献をする部署に入ったのですけれども、その中でトップアス

リートを招いてのスポーツイベントやワークショップを開催、企画運営する側の仕事をしていて、逆に、徐々に自分自身の経験を生かす、アスリートとしての経験、そして病気を乗り越えてきた思いを仕事に生かせるという役割をもらいました。スポーツに関しても、仕事に関しても、私にしかできないチャレンジだと思います。こうしたモチベーションを持ってやれてきたことで、自分にもプラスになっていて、会社にも貢献できているかなというふうに思っています。

質問 大学時代はチアガールをおやりになっていて、骨肉腫で切断されて、それからリハビリを兼ねておやりになった、大変なご苦労があったと思うんですが、練習で特に問題があったのはどういう点でしょうか。

佐藤 練習でですか。

質問 さっきは環境とかお金とか、いろいろ出ましたね。そういう……。

佐藤 チアリーダーとして2年間活動して、1年間近く入院をして、それから残り1年間で就職活動プラススポーツを再開という大学生活だったのですが、一番大変だったのは、情報が少なかったことだと思います。

いまから10年前ですので、インターネットの情報も含めて、いまとは比べ物にならないほど少なかったです。入院中も、パラリンピックの情報はなく、自分がスポーツできるという可能性がみえなかったので、退院しても将来についてすごく不安がありました。

そうした中で、敷かれた道ではなくて、本当に道なき道を人との出会いによって手探りで進んできました。その過程で、義肢装具士の方ですとか、コーチやトレーナーなど様々な人との出会いがあったからこそ開けてきたんですけれども、それまでは進む道がなく明るい未来がみえなかったことが大変でした。

いま同じような道を歩んでくる子どもたちにとって、そういうことのないように……。いまはもう「オリンピック・パラリンピック」と出ていますから、明るい未来はみえますし、あと進むべき道、出会っていきべき人というのは割と情報が得やすくなってきてはいるかなと思っています。今後さらに、この輪を広げていけたらと考えています。

質問 義足のメンテナンスとか、そういう問題は、お金の件に関しては大変だったと思うんですが、それはどうなんでしょうか。

佐藤 そうですね。大学生でしたから、最初は、

競技用の義足に関しても、やっぱり高価なものですので、壊れたら大変だなという気持ちはありました。

司会 では、私のほうから。

競技生活とは別に、招致活動を通じて、佐藤さんが得られたものがあるとすれば、その得られたものを今後どう生かしていきたいか、お話し願えれば。

佐藤 招致活動という、本当にかげがえのない経験をさせていただいたんですけれども、その中で、プラスになったものはたくさんあります。その中で、プレゼンテーションではアスリートとして、日本を代表してメッセージを外に発信するという役割を担わせていただき、日本人としての自覚が高まりました。

その経験をする中で、視野をグローバルに広げさせてもらうことができました。アスリートとして海外の大会に出ていくときに、その競技に集中するのはもちろんですけれども、それ以外のコミュニケーションも心がけて、多くのつながりをつくって、その情報を日本に持ち帰りたいという思いを持てるようになったことも得られたものの1つかなと思います。

アスリートとしては、年齢的にも一年一年を大事にという時期には来ているのですが、海外の方々とのネットワークを大切にして、また新しい人と出会い様々な情報を持ち帰ることも、常に心がけていきたいと考えております。

質問 2つ教えてください。1つ目は、障がい者スポーツを取り巻く環境について。もう1つは、東北、故郷の気仙沼のお話についてです。

1つ目の障がい者スポーツを取り巻く環境についてですが、体験会、ロンドンのお話の中にも出てきましたが、健常者の人と障がいをお持ちの方が一緒にスポーツを楽しむ機会はここ最近増えてきたのかなとは思っているんですけれども、いまの動きの中でまだ足りないものがあるのか、それは数量だけの問題なのか、質として何かこういうものがあつたらいいのと思う点があるのか、まずこれを教えていただけますか。

佐藤 ご質問ありがとうございます。

パラリンピック選手を目指すということだけではなく、地域毎にだれもがスポーツをできる環境というのはまだまだだなと思うところがあります。それはもちろんハード面、例えば体育館や競技場に車いすが入っていけないようなつくりになっている、器具を使えないようになっているということも大きなハードルですけれども、もう1つ、接する側の心の部分のハードルもあるのかなと思っています。

例えば、障がい者スポーツの指導員の資格を持っている人でしか指導できないと思われると思うんですけども、実は、トレーニング方法に関しても、私自身、工夫で一般のトップアスリートと同じようなことをいま現在もやっておりますし、コミュニケーションしながら必要なものをお互いに言い合って、サポートしてというふうな、地域レベルでの交流が増えていくことが理解を進めていく後押しになるのかなというふうに感じています。

質問 もう一点、復興絡みといいますか、東北、特に故郷の気仙沼のお話になるかと思うんですけども、間もなく3年たとうというタイミングがやってきますが、いままで被災地である気仙沼に里帰りとか、小学校での講演とか、事あるごとに佐藤さん、行かれていますと思いますが、この3年間を通じて、何か変わってきたなと感じられること。その変化があるとして、それを7年後にどういうふうに伝えていきたいかという思いを教えてくださいいただければと思います。

被災地と障がい者 周りが守る存在から一緒に進む前向きな雰囲気

佐藤 つい先週も宮城県の石巻に行ってきましたし、今週も木曜日から宮城に行くんですけども、そうやって足を運んでいく中で、被災地ですとか被災者という言葉ではない、ぐっと前に進もうとしている時期に入ってきていると感じています。被災地という言葉が、私の中ではですけども、ある意味で障がい者という言葉とかぶっていて、どうしても周りが守ってあげなければいけないという存在というイメージが正直あるんです。そうではなくて、一緒に進んでいく、盛り上げていこう、そういう前向きな雰囲気になってきているのかなというふうに思います。

それを7年後にどう……。そうですね、7年間、ある意味で、日本全国から、そして世界中から注目を受けるということが大きな励みになると思います。もちろんたくさんの方に支えてもらって、いま現在もたくさんの方の応援が、支援がある中で、感謝の気持ちを伝えていくためにも、それは言葉ではなく、元気な姿を通して発信していくことも今後のモチベーションになっていくと思いますし、自分自身もその一助になればいいなと思っています。

2020年の聖火ランナーで東北をみせるだけではなく、その過程を一緒に歩んでいく、そういう目標があることが、今回2020年のオリンピック・パラリンピックを招致したことによってより一層強くなっていくのかなと期待しています。

質問 僕らスポーツ紙の世界だとパラリンピックについて触れる機会が少なく、今回、佐藤さんがプレゼンテーションされた後なので、全国障がい者大会のときも大きく扱ったんですが、実

は優勝した選手ではなくて、佐藤さんにスポットが当たる形で、時の人としての扱い方でした。アスリートとしての扱い方としてどうだったんだろうというがありまして、ここから7年間で、僕らメディアが考えていかなければいけないのですが、どうすればパラリンピックそのものがスポーツとして、アスリートとして扱われることになるのか、ヒントでもいただけたら。

もう1つは、2020年、年齢的な問題は別として、佐藤さん自身は目指すお気持ちがあるかどうか。もしアスリートでなかったらどういう携わり方をしたいか、教えてください。

ドラマ性や「障がいを乗り越える」報道から、エキサイティングなスポーツとしてとらえてほしい

佐藤 ご質問ありがとうございます。

招致活動を終えて帰ってきた後の最初の大会であったスポーツ祭東京に、これはもちろん練習ができていない3週間がありましたから、とてもハードではあったんですが、まずは参加することに意義があると考えました。そのことによって、メディアの皆さんに、招致活動だけではない、アスリートとしての姿も伝えていただける機会にもなりました。そこで、それを継続して7年間、さらにこの動きを大きくしていくという必要があると考えていますが、それには皆さんのお力をおかりしたい、それに尽きると思っております。

ヒント……。どちらかという、これまでパラリンピックという、障がいを乗り越えるドラマ性にフォーカスされることが多かったと思いますが、純粋にスポーツとして、アスリートとして、実はどんどんハイレベルになってきているのです。そういう面を主体として伝えていただけたらいいのかな、というふうに思っています。

欧米では、パラリンピックもエキサイティングなスポーツとして捉えられるようになってきました。日本ではまだパラリンピックという言葉は聞いていても、実際にテレビで見たことがない、新聞でみないという人が多くいるのが現状ですので、そこを継続的にたくさん報道していただくということが大事なのかなと思っています。

いかがでしょうか。

質問 頑張ります。

佐藤 2020年に向けては、もう走り幅跳び選手としては一年一年を大事にという思いを持っていますので、ちょっとまだ考えていないという状況です。2020年は、どちらかという次世代に活躍してほしい大会で、私はその大会の成功のためにかかわっていきたくと思っています。

司会 ありがとうございます。昨年、ロンドンのオリンピック・パラリンピックをみる機会があ

ったんですけれども、日本であれほどパラリンピックが競技として成り立つだろうかというのは、正直言って本当に懐疑的でした。ただ、ちょっと変わっていく兆しが、この招致活動を通じて芽生えてきているのかなという実感はあります。あとは、またみんなで、ということですね。

佐藤 そうですね。

質問 選手の負担額が4年前よりも増えているというお話があったんですが、その背景にある原因は、佐藤さんの目からみて、どういう部分にあると思われるか。お金というのは、競技を続けるうえでキーになってくる部分ですが、どう打開していけばいいのか。国の補助金なり助成金が充実していくことが一番なのか、あるいはほかの手段があるのか。どんなビジョンを持っていらっしゃるかを教えていただけますか。

スポーツとして打ち出しスポンサー、サポーターを広げる

佐藤 ご質問ありがとうございます。

選手たちの負担が増えていることに関しては、私はサントリーにサポートしてもらっているんですけれども、自分自身の年間にかかるお金がより多くなってきているのが正直なところ。より強くなり、海外の大事な大会で活躍するためには、武者修行といえますか、海外により多く出ていって経験を積むということが大事になってくると思います。

私の経験ですが、2年前から一人で海外遠征に積極的に出ていく、大会の申し込みを含めて現地でのやりとり、大会前のミーティングも含めて、一人で体当たりでいく、そういう経験を積む中で、より本番で動揺しないという、もちろんメンタルの面もそうですけれども、成長することができました。また、海外の選手と一緒に練習をすることによって、こうでなければいけないという、例えば競技の技術的なことや本番に向けてのピーキングですとか考え方について、自分の殻を壊すことができました。それで思い切ったチャレンジをしたことで、4年間のスランプから抜け出せたところもあります。

そういう意味で、今後、海外遠征、そして日本での合宿を通じて、より刺激を受ける機会、なれていく機会というのはすごく大切と思っています。

あとは、これはこの4年間で変わってきたということよりは、パラリンピックならではの負担であるんですけれども、例えば競技用の車いす、競技用の義足とが大きな負担になります。大事な大会の時など、1つでは足りないのです。スペアも必要ですし、例えば私の場合は、走り幅跳び用と、ジョギング用の2種類、硬さの違うものを持っています。1つにはスパイクがついていて、もう1

つは、普通の道路でも走れるように、普通のシューズのソールをつけています。そのことで、どこでも練習ができる、やりやすいようになっている分、お金もより必要になってきているというのはこうした点からも実感していただけたと思います。

それをどう打開していくかという点について、2年前に大学院に行ってパラリンピックの研究をして、海外の実際に行われていることを、日本にどうパラリンピックの発展モデルとして生かしていくかという修士論文をまとめていることもあり、ずっと継続して注目しています。

国としてのサポート体制がまずは必要と思いますが、今後、パラリンピックもオリンピックと一緒に文科省の中で強化されていくことが発表されていますので、それは招致活動の大きな成果かなと考えています。

そして、国だけに頼るのではなくて、うまくパラリンピックをスポーツとして打ち出す、そのことでスポンサーを獲得していく。メディアに出していただくことで、より多くのサポーターが生まれ、それによって継続的にさらに大きな輪が広がっていくのかなと考えています。

あともう1つ、パラリンピック選手というのは、大きな障がいというものを越えてアスリートとして活躍しているわけですが、その過程の、例えばリハビリやトレーニングの方法は、今後、超高齢化社会になっていく日本においても、ノウハウとしてもっともっと生かしていけるものだと思います。そのデータを蓄積していくこと、そこに研究としてお金をかけていくことは、決して無駄ではないと思いますし、そういう目線で、より多くの人たちの理解をもらっていくことも必要と考えています。

質問 佐藤さんは早稲田大学の大学院で障がい者スポーツをはじめとしたスポーツビジネスを経験されたんですけれども、その経験がアスリートの活動、あるいは今回の招致のプレゼンや招致活動にどのような影響を与えたか、という点が一点。

二点目は、トップアスリートに追いつくために負担額が増えれば増えるほど、いわゆるエリート化すればするほど、逆に普及の面で言えば、ハードルが高くなっていくという、強化と普及のバランスが崩れるところも起きているかと思えます。7年後に向けて、強化と普及のバランスをどのようにとっていけばいいか、お考えをお聞かせください。

パラリンピックで日本は何を目指すのか

佐藤 ご質問ありがとうございます。

2011年度に大学院に通って日本の課題をまとめたのですが、ちょうどそのときにスポーツ基本法ができて、スポーツ基本計画をつくる際に、ア

スリートの視点としての提言をまとめさせてもらうこともできました。そのときに、日本の課題について整理ができたことで、今度は、海外に目を向けようと思い、どうやってパラリンピックが社会の中で認知されて、継続的な強化と支援ができていくかという視点を持つようになりました。

そのことで、国際大会に行くときに、ただアスリートとして記録を伸ばしに行く、力を出しに行くだけではなくて、触れ合う、積極的にコミュニケーションをとる、どんな練習環境なのか、お金はどういうふうに出ているのか、今後のパラリンピック選手としての責任についてどう考えているのか、そういうところを、情報収集を常に——情報収集というよりは、自分が知りたくてという姿勢に変わりました。

やらなければいけないという感じではなく、常に情報に敏感になる、視野を広げるということにつながったので、招致活動においても役立ったと考えています。もちろん3月があって、9月があってという中で、インターネットで海外の情報を集めたり、それは招致活動にしても、パラリンピックの情報についてもなんですけれども、その種目で日本を代表するということは、そういう役割もあるというふうに考えています。

あと、強化と普及のバランスについては、それは海外がいいモデルになると思うんですけども、何を指すかという部分が大切で、それが理念にならないといけないところだと思います。それがスポーツ先進国ということだけを目指すのか、例えば北欧諸国のように、ノーマライゼーション、全ての人が平等になるのを目標にするのか。また一方では、ダイバーシティを進め、今後、一人一人の個性を尊重して認め合う社会になるために、パラリンピックをうまく生かしていくのか。そうしたいろんな考え方があって、その中で日本がどれを目指すかについては、私たちだけでは決められるものではないと思います。今後、議論を重ねて、そこから強化だったり、やっぱり普及も必要だよ、というふうになると思いますし、それを継続するためにも資金獲得が必要だよ、という面で、その、何を指すか、どういう日本をつくっていくのかというのが固まらないと、強化と普及のバランスというのは、おっしゃるとおり崩れていくのかなと思います。

質問 いま、佐藤さん、サントリーのコーポレートコミュニケーション、CSR推進室ですね。サントリーがどの程度あなたに援助しているか。お聞きしたいと思います。

佐藤 練習時間については、通常、会社には9時の始業時間から出社して、あとは夕方4時ぐらいに会社を出て練習に向かうというスケジュールになっております。また、合宿や海外遠征については、勤務扱いとしていただいております。

私は、アスリートとしてだけではなく、小学校

に行って子どもたちと交流を続けることを並行してやってきました。その延長線上で、パラリンピックのPRですとか普及にも取り組んでいたのですが、それが招致活動にもつながりました。招致活動というのは、直接的には私の勤務するサントリーとかかわりはありませんが、9月のブエノスアイレスから帰国してすぐに出社し、社長室に挨拶に行ったところ、社長表彰をいただきました。パラリンピアンとしての活動に対する資金援助も受けていますが、全社で応援してくれていることに、あらためて感謝しました。

その中で、これまで、私だけではなく、ラグビー部、バレーボール部と、スポーツを通して日本を元気にしていこう、決してそれは宣伝活動ではなく、続けてきたというところがあるので、私もその一員に加わらせてもらえてきたことがすごく大きな支えになりました。

質問 企業のサポートについてお伺いしたいんですが、企業にとっても、パラリンピックの選手を支えることは、お金がどうしてもかかるわけで、どうやったら通常の選手たち、健常者のオリンピック選手を支えるのと同様に、企業がみるのか。国の支援と同様に一般企業の支援も重要になってくると思うんですが、どのように企業の意識改革が必要なのか、どういうものを求めているのかをお伺いしたいんですが。

パラリンピックにしかないチャレンジのメッセージ 企業も伝えたい

佐藤 ご質問ありがとうございます。

大きな体制でパラリンピックを目指すチームをサポートするのは大変だと思うのですが、実は社員として雇っていくということが十分サポートになっているのです。お給料をもらって、そのお金があるという安定感は、自分の中でも大きかったです。競技を継続して、さらにその後も仕事をしていける、そういう環境をもらえること。そして、アスリートとしても理解をもらえることは、大きなサポートだと思います。

私がサントリーにいることで、みんながいろい

ろ理解をしてくれる、そしてみんなが、今回は「力をもらった」と言ってくれる、お互いにいろんなことを感じられる貴重な機会が生まれると思うんです。会社の中で一人のアスリートをサポートしていく、応援していくということも、今後より多くの企業にやっていただきたいと思っています。

オリンピックのスポンサーは、現状、たくさんあると思うんですけども、パラリンピックというのは、正直、少ないです。その中で、パラリンピックにしかないメッセージがあると思うんです。やはり限界を打ち破っていく、もちろん障がいがありますけれども、それ以上に自分の力を出し切る、トップアスリートとして戦っていくという姿に、企業が同じように伝えたいチャレンジするメッセージというものがあれば、お互いにリンクしてメッセージを出していけるのかなというふうに感じます。海外ではそれがうまく活用されているので、日本でもぜひ、例えば企業のCMや広告に活用してもらえればいいのかと思っております。

司会 ありがとうございます。佐藤さんに、事前に揮毫をいただいております。「夢は続く」というものです。「夢は続く」について、一言。

佐藤 スポーツの力を日本に、そして世界中に広げたいという思い。それから、地元である東北への思い、そしてパラリンピックももっともっと盛り上げていきたい、この思いを持って招致活動に取り組んできましたが、それが2020年、今度はみんな目指すオリンピック・パラリンピックが日本に来たというところで、夢というものが続いたなというふうに心強く思っております。

司会 ありがとうございます。これで会見を終了します。

佐藤 ありがとうございます。（拍手）

（文責・編集部）